



川本 明

アスパラントグループ
シニアパートナー

世界が広がったとき

時は1986年10月18日。場所は英国オックスフォード大学のシェルドニアン・シアターの前。私は一緒に留学した妻と、同シアターで開催された入学式に出席した。出てきたところをカナダ人の友人が撮ってくれた。

ニコニコしている理由はそれだけではない。通産省に入省して5年間の「丁稚奉公」が明け、「いつかは外国に」と切望していた留学が実現したのだ。

学生は中世に建築されたカレッジに起居する。水漏れ、すきま風などは珍しくない。「自由とは何か」など、与えられたテーマにつき課題書を読み込んでエッセーを書き、先生と一対一で議論する、チュートリアルと呼ばれる授業が毎週2～3回ある。日はつるべ落として短くなり、朝起きても真っ暗なまま、図書館に向かう。クリスマスともなると英国人の学生は帰郷し、辺りは静謐に包まれる。

カレッジの食事は、ハリー・ポッターの映画さながらの趣は

あるものの、決しておいしくはなかった（結果として自分の料理の腕前が上がったのは想定外の収穫だったが…）。ただ、大学院生は「ハйтеーブル」と呼ばれるひな壇で、先生たちと同席する特権があり、そのときの料理とワインは魅惑的だった。

何とか勉強を続け、イースターが過ぎ日は次第に長くなる。鮮やかな緑があふれ、花が咲き誇り、何もかもが輝いているように感じる季節になって学期は終了！ 芝生に思い思いに寝そべり、本を読み、友と談笑した。「バンティング」といわれる川遊びをしたり、パブでいつまでも暗くならない夜を飲み明かしたり。カレッジのサッカーチームにも所属した。アジア出身者は私だけで、シュートを決めたときには皆目を丸くしていた。

今思えば、キャメロン元首相もジョンソン現首相もそのときのキャンパスにいた。私の人生で世界を一気に広げてくれた2年間の経験が、全てはここから始まった。そんな一枚だ。

